

鶴見酵素栄養学と出会って

有限会社ドゥープラス 代表取締役 山本利夫

薬剤師になったきっかけ

私は薬剤師です。その薬剤師になろうとしたきっかけは、中学の理科の時間にこの世界の全てのものが元素というものでできているという事を知ったからでした。へ人間の体は化学反応で成り立っているという話を聞き体で起きていることは、化学反応でいずれ全て解明出来るのだろう、へ化学反応とは一体何なのだろうか、へそれほど化学が得意ではない私でもいつかわかるだろう」ということにとってもワクワクしていたのを覚えています。そのようなきっかけで薬学や化学に憧れて薬学部を目指し、横浜に初めて薬局を開業したのが今から27年前です。



薬局での業務を行っている中の疑問

当時、私は薬局での業務を毎日行っているうちに一つの疑問が沸き起こっていました。ある患者さんは、何度も熱を出したり、ある患者さんはお腹の調子が悪くなって何度も同じ薬をもらいに医療機関を受診します。また同じ薬なのによくなる人とそうではない人がいて病気は人によって違いがあることを実感していました。そして現状の医療では原因の治療ではなく医薬品はほぼ対症療法であり、原因の治療はあまり行われていないことに戸惑いを感じるようになったのです。元々体には病気を治す力があり、その自然治癒力を引き出すのが目的とする治療もあると思います。かつて高血圧の薬を飲んでいたが【今は血圧が正常になって薬は飲んでいません】というような方には残念ながら出会えていません。病気の原因は最近ある程度わかってきたものの、へその原因に対して根本から治療していくことはなかなか難しいのではないかと。へということが私が薬局業務の中で感じたことでした。へ人を元気にするにはどうしたらいいの因は最近ある程度わかってきたもの、へその原因に対して根本から治療していくことはなかなか難しいのではないかと。へということが私が薬局業務の中で感じたことでした。へ人を元気にするにはどうしたらいいの



薬局で働いている際の酵素の理解

それまでは、大学卒業後10年間外資系の総合化学会社の医薬事業部というところで働いていました。その部署では医薬情報担当者として、開発の方たちの仕事などもお手伝いしていました。大変内容の濃い、その後の人生で役に立つことをたくさん学びました。その頃の私の酵素に対する理解は次のようでした。酵素という名前から連想するものは、消化酵素や代謝酵素だけでなく、薬剤も挙げられます。それは酵素製剤と酵素阻害剤です。

酵素製剤とは、酵素そのものを補って消化不良や炎症などを抑えるもので効果が弱かったり、不確かなため保険医療で使えなくなってしまうようなものもあります。酵素阻害剤とは、ある反応をつかさどる酵素反応を妨害して身体の過剰な反応の状態を抑えるような働きをするものなどです。この酵素は血圧を下げる薬などが代表的です。酵素は触媒なのでそれ自体は変化せずに、化学反応を促進させます。そして体内で必要に応じて作られ、その反応は効率よく働きます。作用するのに最適な温度、PHがあり体に必要となるとすぐに生成され、あまり必要とされないと能力が抑えられる。私の酵素の知識はこの程度のものでした。

鶴見先生との出会い

ある健康産業界の展示会場で取引先のメーカーの方にあるブースの前で会い、その時に初めて鶴見先生の『鶴見酵素栄養学セミナー』というものがあることを知りました。

医療に携わる先生からどのような話が聞けるのか興味がありましたので、事前の説明会に参加してみました。私はその説明会后、先生のセミナーにぜひ参加してみたいと思っていました。

『鶴見酵素栄養学セミナー』に参加してみたところ、今までの酵素に対する理解をいい意味でものの見事にひっくり返され、授業では習わないことばかりを学ばせていただきました。だいたい酵素は触媒なので減ることはないとかって教科書で習ったので、それほど酵素が重要とは考えていなかったのです。鶴見先生が「医薬品は最大の酵素阻害剤です。」とおっしゃいました。

薬品はチトクロームという酵素で代謝されて体外排出されていきますが、医薬品の代謝に酵素が使われてしまったら、酵素全体量が減り肝心の体を維持、補修していくための酵素が欠乏状態になってしまいます。酵素不足の体では自然治癒力が発揮出来ないのも頷けました。それから、投薬する患者さんとの会話に酵素の話が加わるようになりました。『鶴見酵素栄養学セミナー』では、酵素の話だけでなく多岐にわたり、豊富な知識をいただきました。この知識をなんとか人の役に立てるよう、より深く学んでいきたいと思えます。

